

## 平成 27 年度弘前大学グローバル人材育成事業モデル事業

### 学生市民等協働プログラム報告書

申請者	所属部局・職名	教育学部
	氏名	北原 啓司
事業名	漢陽大学（ソウル市）との連携による旧日本人居住地区の街なみ調査	

#### 事業の概要とその成果

##### 事業概要：

韓国の仁川市には、旧日本人居住地区が住環境未整備のまま現存している地域があるが、戦前の我が国と韓国との関係性もあり、政府も積極的な整備施策を進めてこなかった経緯がある。しかし、近年、仁川市の中区役所が中心となって、日本人居住地区を含めた旧中心市街地の環境整備事業をスタートさせている。本事業は、ソウルの漢陽大学で建築史を担当している富井正徳特任教授のご協力の下、戦前の建築物のリノベーションの実態を調査するとともに、区役所職員、リノベーション住宅の所有者、まちづくり関係者へのヒアリングを行った。

##### 目的

かつては閑静な漁村であった仁川市においては、1883年の仁川港開港以降、日本人居留地が拡大し、日本人により建築や町並みが開発されていった。しかし1945年の解放以降は、建物自体の著しい老朽化を理由としながらも、一方で韓国人にとっては当時の辛い記憶を思い起こすという理由から、日本人家屋はじめ建築物は次々と取り壊されていった（写真-1, 2, 3）。しかし近年は、それらに近代的価値を注入しながら「敵性資産」として新たに認識し直す「近代景観保存プロジェクト」が発足し、保存に向けた動きがみられる過程で、意識の変化や、地域の再生計画が始まりつつある。

そこで、我が国の戦災復興計画とは明らかに異なる旧日本人居留区の住環境整備および地域の再活性化に関する動きを明らかにすることを目的とする。



（左から）写真-1, 2, 3 老朽化した旧日本人家屋

##### 研修内容

仁川市の旧市街地を対象とし、現地調査とヒアリング調査により、日本人居住地を含めた住環境の成

立と変遷について明らかにする。プレ調査を含めて4回の渡韓調査を実施したが、その日程は、以下の通りである。

1. プレ調査 平成27年4月26日～29日

NPOあおもりコリアネット事務局長の角俊行氏とともに、北原及び大学院博士課程学生1名が本調査の協力者となる漢陽大学の富井正徳教授の研究室を訪問し、今後の研究スケジュールを調整するとともに、仁川市の旧日本人居住地区のプレ調査を実施した。

2. 本事業費による第一次調査 平成27年10月21日～25日

北原および大学院博士課程学生1名の他、弘前在住の建築家である蟻塚学氏（教育学部非常勤講師）、大学院修士課程学生2名、教育学部生（4年）2名のメンバーで、あおもりコリアネットの朴芝仙氏の通訳協力の下、仁川市「官洞ギャラリー」経営者戸田氏のヒアリング調査および街なみ視察、また、漢陽大学の富井教授の演習成果発表会に参加した。

3. 本事業費による第二次調査 平成27年11月29日～12月2日

弘前大学住居学研究室のコアメンバーの他、前述の建築家・蟻塚学氏、そして角氏の通訳の協力を得て、仁川市以外にも存在する日本人居住地区としてソウル市西村の実地調査を漢陽大学富井教授と実施し、また仁川市の官洞ギャラリーを再訪し、隣接地区のリノベーション事例（pot\_R）のヒアリング調査を実施し、ツアーコンダクターの韓重澤氏から仁川市全体の都市計画の状況に関するレクチャーを受けるとともに、次回調査に関する打合せを実施した。なお、本学地域社会連携課係長にも同行していただいた。

4. 本事業費による第三次調査 平成28年2月21日～2月24日

弘前大学住居学研究室のコアメンバーに加えて、坂本氏（弘前市観光コンベンション協会事務局長、路地裏探偵団団長）に参加していただき、仁川市旧市街地およびソウル市西村の路地裏調査を詳細に実施した。また、前述の戸田氏の通訳協力の下、仁川市中区役所李承善室長ほかに対するヒアリング調査を実施し、中区役所としての景観整備の方針や具体的な手法を明らかにするとともに、一方で都市化が進む新市街地視察を前述の韓重澤氏の解説とともに実施した。

以下に、それぞれの詳細を述べる。

(1) 漢陽大学訪問（平成27年4月27日）およびオープNSTAジオへの参加（平成27年10月24日）

仁川市では、「敵性資産」としての日本人居住地区の建築物に近代的な価値を見出すことで、「保存」ではなく「保全」していく動きが広まっているが、推進力となってきたのは、漢陽大学の富井正憲教授による仁川市旧市街地を対象とした改修プロジェクトである。

富井教授は学生と共に仁川市において調査を実施し続け、老朽化が進み解体寸前であった日本人家屋の改修・活用について助言を与えることで、「pot\_R」や「官洞ギャラリー」のように新たな息吹を吹き込むことで保全につなげてきた。

本調査では、まず漢陽大学の富井教授の演習に参加させていただき、学生チームによる中間発表を見学させていただくとともに（写真-4,5）、10月に仁川市の官洞ギャラリーで開催されたオープNSTAジオでの学生の研究発表会にも参加させていただいた。（写真-6,7）。



写真-4 富井教授 1



写真-5 富井教授 2



写真-6 漢陽大学生の発表 1

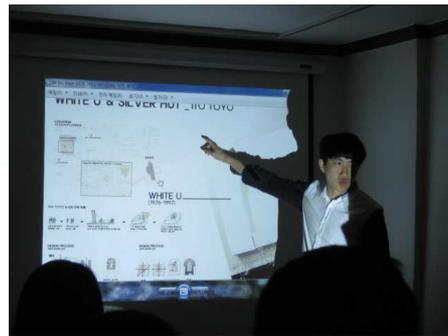


写真-7 漢陽大学生の発表 2

(2) 仁川市官洞ギャラリーおよび周辺地区実地調査 (平成 27 年 4 月 28 日、10 月 22 日、12 月 1 日)  
今回の調査対象で最も重要な位置づけとなるのが「官洞ギャラリー」である (写真-8,9)。官洞ギャラリーの 1 階には日本の伝統工芸品が展示・販売されており、遠足で訪れる高校生の関心を惹きつけている。奥はゲストハウスとしても活用されており、1 部屋 1 泊 5 万ウォン (2 名まで・1 名追加ごとに +1 万ウォン) で宿泊が可能である。学生が宿泊するなどして好評を得ているとのことであった。2 階は展示スペースであり、後述の富井教授の研究室の研究成果として、建築模型やパネルが展示されている。

かつては天井で閉ざされていた屋根裏部屋は、改修工事の際、天井を除却したところ発見された。骨格は当時のまま残されており、その中心を 90 年前の一本の大木が貫く形で、隣の家屋とつながっている。この大木が、「6 軒長屋」としてのつながりを証明しているのである。ベランダ裏には裏庭があり、当時はそこで近所同士の「裏庭コミュニティ」が形成されていた。

「官洞ギャラリー」経営者であり作家・翻訳家の戸田氏によると (写真-10)、官洞ギャラリーがオープン後、仁川市に縁ある人物の訪問が増加している。親族がかつて仁川市に居住していた痕跡を知る目的の訪問者や、自身が居住していた家屋を探す目的の訪問者など後を絶たない状況であるという。



写真-8 6 軒長屋



写真-9 官洞ギャラリー屋根裏部屋



写真-10 戸田郁子氏（写真右）

戸田氏自身も、仁川市の歴史ある住宅に居住していることで、家が人生に作用し、仕事させ、考えさせるという現象が起きていると述べている。単に寝て食べるという意味の家ではなく、歴史も含めて保全する家であり、次に引き継ぐことでまちのためにもなるという考えに至っている。

官洞ギャラリーが改修オープンしたところ、ギャラリーと同じ通りに面していた空き家の2軒が売却され、新たな居住者が入居する予定である。周辺でも、空き家のまま放置されていた日本人家屋に対してリノベーションを取り入れ、若い経営者によりカフェがオープンするなど、歴史的保全というよりも現代風に保全する動きが広まっている（写真-13, 14, 15, 16, 17, 18, 19）。さらに、近隣の資産価値や地価も上昇し続けているということであり、点としての空間整備のみならず、面としてのエリアマネジメントが確実に進み始めている。



（左から）写真-11 「pot\_R」隣接の老朽化した建築がリノベーションされる過程（平成27年10月）



写真-12 「pot\_R」隣接の老朽化した建築がリノベーションされる過程（平成28年2月-1）



写真-13 「pot\_R」隣接の老朽化した建築がリノベーションされる過程（平成28年2月-2）



（左から）写真-14 老朽化した建築がリノベーションされる過程（平成27年10月-1）



写真-15 老朽化した建築がリノベーションされる過程（平成27年10月-2）



写真-16 老朽化した建築がリノベーションされる過程（平成 28 年 2 月-1）

写真-17 老朽化した建築がリノベーションされる過程（平成 28 年 2 月-2）

### （3） 仁川市中区役所に対するヒアリング調査（平成 28 年 2 月 22 日）

仁川市の旧市街地を対象エリアとして設定し、推進されている「近代景観保存プロジェクト」について、仁川市中区役所の李承善氏にヒアリング調査を実施した（写真-18, 19, 20）。

当プロジェクトでは、行政（仁川市中区）が指定する顕彰施設（文化施設やギャラリー）に対して 300 万ウォン（日本円で約 30 万円）、準顕彰施設に対して 150 万ウォン（日本円で約 15 万円）の支援金が支給される。ただし、私的改修への補助は設けられていない。また、用途は商業系を対象とし、住宅系は対象外である。



（左から）写真-18, 19, 20 中区ヒアリング調査

近代遺産プロジェクトの支援金を活用しリノベーションを実施した物件第 1 号が、かつては荷役会社事務所兼住宅として使用されていた町屋様式の日本人家屋を、カフェとして改修し 2012 年にオープンした「pot\_R」である（写真-21, 22, 23）。現在は店舗空間である 1 階は事務所に、2 階と 3 階は住居空間として使用されていた。



写真-21 「pot\_R」外観



写真-22 「pot\_R」店内



写真-23 「pot\_R」2 階の和室

## 成果

以上、仁川市の旧市街地においては、エリアマネジメントが確実に進み始めているものの、実際はエリア内には多数の更地が点在している。また築 100 年の旧日本人家屋は老朽化が進み、空き家も増加しており、これからがマネジメントの正念場である。また、仁川市中区議員においても、高度制限を解除する開発推進派と、近代遺産保存派に分裂しており、市全体で保存に取り組んでいく体制には未だ至っていない。

今後は単に空き家のリノベーションにより、住宅を再生するのみならず、周囲の空いた空き地も巻き込みながら、地域全体のマネジメントが必要になると思われる。

以上